

# 幼児の人間関係力を育む異年齢保育の方法： ある幼稚園の指導計画と園長への質問紙調査から

上 田 淑 子・永 野 あ や

## Multi-age Class to Build Children's Human Relationship Ability: Weekly Teaching Plan of a Kindergarten and the Director's Answer to Questionnaire

UEDA Yoshiko and NAGANO Aya

**Abstract:** A potential anxiety about the difficulties in adopting single-age class as a preschool teaching system is considered to be a reason for less prevalence of the multi-age class system in Japanese preschools. To reduce the anxiety, we describe an example of the teaching system of a multi-age class carried out in a kindergarten by analyzing the yearly and weekly teaching plans and the director's answer to the questionnaire. Descriptions specific to the multi-age class were very limited in the yearly plan and teachers' supports written in the weekly plans. The director's answer explained that pairs of different-age children were formed at the beginning of the semester and continued to behave together every day, by which they naturally made emotional intimacy with each other. The results indicate that the multi-age class system of this kindergarten was successfully performed by pairing the different-age children at the beginning without teachers' supports to keep their relationships thereafter, and therefore that special plan and supports for multi-age class were unnecessary for the system. This means that changing to the multi-age class is not so difficult.

**Key Words:** multi-age class, pair of different age children, human relationship ability, teaching plan, preschool

**要旨：**幼児の人間関係力を育む意義がある異年齢保育が広がらない理由として、年齢別保育から異年齢保育への転換に潜在的不安があることが考えられる。その不安を減らすため、2年保育の公立幼稚園が行っている異年齢保育の方法を、市の年間指導計画、園の週指導計画（週案）、および異年齢保育についての質問に対する園長の回答から分析して紹介した。年間指導計画と週案に記述された教師の関わりでは異年齢保育を意識した記述は少なかった。園長の回答では、入園当初に異年齢児のペアを作り、日常的に共に行動する方法で自然に異年齢児の交流が生まれることが説明された。以上から、同園では、最初に異年齢児のペアを組んで共に生活しているだけで自然に異年齢児の交流が起こるため、その後は異年齢児の交流を促す指導計画や援助がなくても異年齢保育ができている。このことは、異年齢保育への転換にあまり不安をもつ必要がないことを示している。

**キーワード：**異年齢保育、異年齢児ペア、人間関係力、指導計画、幼稚園

## 1. はじめに

少子化の今日、幼稚園、保育所、認定こども園など集団保育施設における子ども同士の関わりが重要になっている。その中でも、家庭や地域で異年齢の子ども同士の触れ合いが少なくなっているため、集団保育施設の中での異年齢児間の交流が重視されている。幼稚園教育では、中央教育審議会報告（中央教育審議会 2000）において異年齢児との交流に積極的に取り組む体制の充実が求められている。また、保育所保育においても『保育所保育指針』（厚生労働省 2008）の第三章「保育の内容」で「異年齢の友達など、様々な友達と関わり、思いやりや親しみを持つ」という文言が加えられている。

異年齢児の交流を常時促す保育形態は、異なった年齢の幼児でクラスを構成する「異年齢保育」である。異年齢保育には、異年齢の交流を目的として異年齢混合クラスにする「理念的異年齢保育」と、小規模園で人数的に年齢別クラス編成が不可能な場合の「条件的異年齢保育」がある（宮里 2001）。我が国における異年齢保育に関する研究を概観すると、2000 年以降に、異年齢保育と幼児の発達との関係や異年齢保育の意義についての研究が最も多くなっている（大山ら 1994, 広瀬・太田 2010, 小泉ら 2013, 山本・藤井 2014, 島田 2016, 田中 2017）。

このように、国が幼児教育における異年齢児の交流の重要性を指摘し、かつ、異年齢保育の意義が学問的にも指摘されているにもかかわらず、集団保育施設における異年齢保育の普及率は必ずしも高いとはいえない。日本保育協会（1998）が 20 年前に全国の公私立保育所に対して日常的に実施している保育形態を調べた結果、「異年齢混合」が 5.4%, 「基本的に異年齢混合だが、同年で保育することがある」が 10.1%, 「基本的に同年齢だが、異年齢混合で保育することもある」が 72.1%, 「同年齢」が 11.6%, 未回答 0.8% であり、日常的または基本的に異年齢保育を行っている保育所は 15.5% にすぎなかった。その割合を地域別にみた場合、大都市（都区部と指定都市）で日常的に異年齢保育である保育所はわずか 2% であった。

この全国調査以降、保育形態についての全国調査は行われていないが、2013 年に三重県全域の 161 公私立保育施設から得た異年齢保育実施状況についてのアンケート調査結果では、普段から異年齢保育を行っている施設は 50% であった（石川 2017）。施設の規模

別にそれを見た場合、理念的異年齢保育とみなされる 65 の超大規模施設（平均園児数 101.3 人）では 32% が異年齢保育を行っていた。また、2007 年に札幌市内およびその周辺の公私立保育所 117 施設から得られてアンケート結果では、異年齢保育に何らかの形態で取り組んでいる保育所は 76% であった（吉田 2009）。さらに、2009 年に福岡県の保育所・幼稚園に対して異年齢保育を行っているかどうかを聞いたアンケート調査では、44 施設のうち 34（77%）の施設が行っていると回答した（永久 2009）。これら 3 地域の調査のうち、後 2 者のアンケートでは異年齢保育が日常的かどうかを聞いていないため、日本保育協会（1998）の全国調査の結果とそのまま比較することはできない。しかし、三重県の調査は、異年齢保育の場を「普段から」「特定の時期や行事と連動して一時的に」という区分をしているため、その調査での「普段から」は全国調査の「異年齢混合」と「基本的に異年齢混合」に相当すると考えられる。その割合（50%）は 20 年の全国調査の 15.5% と比べて明らかに高く、異年齢保育が広がっていることを示した結果と言える。ただ、同調査の理念的異年齢保育が可能なはずの超大規模保育施設の 3 割しか普段から異年齢保育を行っていないという結果は、理念的異年齢保育は依然として少数派であることを表している。

異年齢保育が保育形態の主流にならない理由は、その意義が保育施設側に十分に認識されていないためとは考えにくい。実際、日本保育協会（1998）の全国調査では、異年齢保育を主な保育形態とする保育所は 2 割に満たないにもかかわらず、異年齢保育を行う理由を聞いた質問項目（選択式で複数回答可）には、地域に限らず 70% 前後の保育所が「やさしさや思いやりの気持ちを育む」といった意義を認めている。そのため、異年齢保育が広がらない理由は意義の認識不足ではなく、異年齢保育へ転換する際のハードルがあるためでないかと考えられる。そのハードルの 1 つは、異年齢保育では年間計画や保育方法が難しくなり、保育士や教師の負担が大きくなるのではないかと、という潜在的な不安であろう。石野（2014）は、幼保一体化に向けた研修モデルを検討するために 788 名の保育者にアンケート調査を行った結果、研修内容として「異年齢保育の内容と方法及び配慮事項について学ぶ」ことが最も重視されていることを明らかにした。石野はその理由として、幼保一体化によって幅広い年齢層の子どもが在籍することが予想されることと、少子化の中で異年齢保育の重要性が増していることを指摘してい

る。言い換えれば、保育者は異年齢保育への移行を意識しつつも、異年齢保育に対する情報不足に不安を抱いているということである。その不安を減らす方法として、異年齢保育についての情報を提供する研修が重要であることは言うまでもないが、日常的に異年齢保育を行っている園のノウハウを具体的に知ることも必要であろう。

異年齢保育を導入するために必要な情報は、異年齢混合集団の中で起こる個々の保育場面での保育者の援助や対応のし方とともに、具体的な保育計画や方針である。保育者の援助や対応については、渡邊（2008）が異年齢保育を始めた保育所で保育士が遭遇するいくつかの問題とそれ克服した事例を紹介している。また、宮里（2001）は異年齢保育の構築を早くから課題とし、3-5歳児の異年齢保育であれば3年をワンサイクルとしてクラス編成を行うことや、異年齢保育の1年間の指導計画を示すなど、現実的な提案を行っている。しかし、そうした情報はまだ十分とは言えず、とくに指導計画やその実践については具体例の情報が少ないのが現状である。

本研究では、異年齢保育についての調査を行うために、異年齢保育の経験が10年以上ある大阪府岸和田市のA市立幼稚園（以下、A園）において、市の年間指導計画とA園が作成した週指導計画（以下、週案）の記録を閲覧させていただき、園長に異年齢保育の方法等について聞く機会を得た。そこで、園の許可を得て、異年齢保育の指導計画をどのように実践しているかを具体的に記述し、同年齢保育との異同を探った。

なお、岸和田市の市立幼稚園は2002年から4歳児と5歳児の2年保育になり、「ファミリー保育」と呼ばれる異年齢保育と「フレンド保育」と呼ばれる同年齢保育を行っている。『岸和田子育てガイド』（岸和田市子育て支援地域協議会2015）によれば、4、5歳児は異年齢児学級保育で、ファミリー保育は「異年齢の幼児が、自然なふれあいの中で、互いに刺激しあい、生活を共に楽しんだり作り出したりします」、フレンド保育は「4歳・5歳が、それぞれの発達に合った経験や活動をしします」と説明されている。市の幼稚園年間指導計画では、1年間3学期5期制で、ファミリー保育とフレンド保育それぞれにⅠ期からⅤ期までの「目標」、「内容」、「環境・援助」が箇条書きの表にまとめられ、入園当初はファミリー保育が主で、次第にフレンド保育を組み入れていくことが求められている。

## 2. 方 法

調査は大阪府岸和田市の市立A幼稚園（以下、A園）で2014年度に行った。調査年の園児は4、5歳児が41名、職員は園長と4人の教師であった。本研究の資料として2013年度の市の年間指導計画とA園の週案を閲覧させていただいた。また、園の指導方針に知るために、園長に異年齢保育に関する質問を記述した用紙に自由記述で回答をお願いした。質問内容はその結果（回答）とともに後述する。それらの資料をもとに、どのような年間計画のもとに異年齢保育が行われているか、また、週案の記録から子ども同士の交流に関わる記述を抽出し、教師がどの程度異年齢保育を意識して保育を実践しているかを分析した。

## 3. 結 果

### 3-1. 市の年間指導計画

表にまとめられた市の幼稚園年間指導計画におけるファミリー保育とフレンド保育の内容をそのまま表1に示した。ファミリー保育とフレンド保育の「目標」を比較すると、どちらも子ども同士の交流や関係性を中心であるが、ファミリー保育には異年齢児の交流を意識した目標は記されてはなかった。保育の「内容」についても、ファミリー保育もフレンド保育も子ども同士の交流を表す「友達」や「互いに」という言葉が多く使われていた。ファミリー保育の「内容」には異年齢保育を明示的に示す表現はなかった。ファミリー保育の「環境・援助」では、Ⅰ期の「共に生活しやすく発達段階に応じた場作りをし、どちらの年齢にも無理がないように創意工夫する」とⅢ期の「4歳児5歳児それぞれの実態をしっかり把握し、持ち味を十分生かせるようにする」の2ヶ所に異年齢保育を意識した表現が使われていた。

ファミリー保育の「目標」や「内容」にある「友達」や「互いに」は暗に異年齢児を指しているともいえないかもしれないが、その記述はすべて同年齢保育にも当てはめられる内容であった。フレンド保育との違いを挙げるとすれば、フレンド保育にある「年長としての自覚」（5歳児Ⅰ期）、「遊びのルール」（4歳児Ⅱ期、5歳児Ⅱ期・Ⅲ期）、「競い合う」（5歳児Ⅱ期）といった社会性を促す教育的表現がないことが挙げられる。

以上から、岸和田市の公立幼稚園の異年齢保育と同年齢保育は「目標」「内容」「環境・援助」のいずれに

表 1 岸和田市の幼稚園年間指導計画 (2013 年)

		1 学期		2 学期		3 学期	
		I 期(4, 5 月)	Ⅱ期(6, 7 月)	Ⅲ期(8, 9 月)	Ⅳ期(11, 12 月)	V 期(1, 2, 3 月)	
ファミリー保育	目 標	・新しいクラスの先生や友達を知り、親しみをもって生活を楽しむ。	・友達と触れ合い、共に過ごすことの喜びを味わう。	・自分の思いを伝えたり、相手の気持ちに気付いたりしながら、遊ぶ楽しさを味わう。	・互いに刺激を受けながら、共に遊ぶことを楽しむ。	・入学、進級への期待をもちながら、互いに成長したことを喜び合い自信をもって行動する。	
	内 容	・健康安全な生活の仕方を身に付ける。 ・絵本や紙芝居を見る。 ・歌を歌ったり、手遊びをしたりする。 ・飼育物や栽培物に親しむ。 ・土や砂で遊ぶ。	・先生や友達と遊ぶ。 ・ごっこ遊びをする。 ・自然物を使って遊ぶ。 ・動植物に触れて遊ぶ。 ・水遊びをする。	・集団で運動的な遊びやリズム表現をする。 ・地域の行事や人々と触れ合って遊ぶ。 ・栽培や収穫をする。	・体を動かして遊んだり、友達と一緒にごっこ遊びをしたりする。 ・身近な自然物に触れたり、使ったりして遊ぶ。 ・友達と一緒にダンスや合奏をする。	・伝承的な遊びをする・ ・冬の自然現象に興味や関心をもつ。 ・共通の目的をもって遊ぶ。 ・修了・進級に向かっての行事に参加する。	
	環 境 ・ 援 助	・幼児の気持ちに寄り添い、安心して生活が送れるようにする。 ・共に生活しやすく発達段階に応じた場作りをし、どちらの年齢にも無理がないように創意工夫する。	・生活全てにわたり、環境の見直しをし、幼児が喜んで生活できるようにする。 ・一人一人の幼児の、興味や関心を知り、適切な援助をする。 ・夏の遊びを存分に味わえるように場作りをする。	・4 歳児 5 歳児それぞれの実態をしっかり把握し、持ち味を十分生かせるようにする。 ・温かくかかわっている姿を認めたり、励ましたりしながら、友達関係が深まるようにする。 ・地域の行事を通して、共に遊ぶ意欲がもてるようにする。	・互いに刺激を受け合いながら、協力してできた喜びを味わえる機会をもつようにする。 ・自然物に触れ、いろいろな気付きに共感し、遊びの中に生かせるようにする。 ・友達を誘って、表現して遊べるように必要な物を準備しておく。	・一人一人の良さを認め合いながら、友達を大切に思う気持ちが高まるようにする。 ・一人一人の成長を受け止め、進級・修了することへの期待が高まるようにする。 ・心を通わせて、過ごせるような雰囲気や場作りをする。	
フレンド保育	4 歳児	目 標	・先生や友達に親しみを持ち、幼稚園生活に慣れる。 ・園生活のきまりを知る。	・先生や友達に親しみを持ち、安心して好きな遊びを楽しむ。	・自分の気持ちや思いを出して、表現することを楽しむ。	・気の合う友達と気持ちを伝えあって遊ぶ楽しさを味わう。	・友達とのつながりを深めながら、生活を楽しむ。
		内 容	・先生や友達と触れ合って遊ぶ。 ・砂や土などの感触を味わって遊ぶ。	・友達とかかわって遊ぶ。 ・いろいろな素材に触れて遊ぶ。 ・簡単なルールのある遊びをする。	・気の合う友達とかかわって遊ぶ。 ・かいたりつくったりして遊ぶ。 ・戸外で体を動かして遊ぶ。	・気の合う友達と一緒に遊ぶ。 ・自然物を使って遊んだり、季節の変化を感じたりする。	・体を動かして遊ぶ。 ・伝承的な遊びをする。 ・いろいろな表現遊びをする。
		環 境 ・ 援 助	・活動する場面や担当する教師・友達を知り、親しみをもって、参加できるように雰囲気作りをする。 ・安心して遊べるように、場を確保し、楽しさを感じられるようにする。 ・スキンシップを大切に、個々の実態をしっかり受け止め、一人一人に応じたかかわりをする。	・教師間の連携を密にし、幼児の実態が十分把握できるように情報交換をする。 ・友達とかかわって遊ぶ中で、個々に合わせて楽しさがわかるように援助する。 ・季節の遊びや自然とかかわりを全身で十分味わえるように、時期を考慮した場作りをする。	・友達とかかわりがもてる場を工夫し、自分たちで活動する喜びが味わえるようにする。 ・いつでも自由にかいたり、つくったりができるように場や材料用具を用意する。 ・体を動かしたくなる環境を作り、十分に運動が楽しめるようにする。	・個人差が大きいので、個々に合わせてかかわり子ども同士のつながりがもてるようにする。 ・教師が仲立ちとなり、互いの思いが伝え合えるようにする。 ・季節の変化を感じる機会を捉え、保育に取り入れるようにする。	・一人一人の体調を把握しながら戸外遊びが十分できるようにする。 ・繰り返し取り組んでいる姿を認め、共感したり励ましたりする。 ・楽しい雰囲気の中で自分の力を発揮できるようにする。
	5 歳児	目 標	・年長としての自覚をもち、友達との遊びや生活を楽しむ。	・友達の思いや、気持ちを受け入れながら遊ぶことを楽しむ。	・思いを伝え合いながら、友達と一緒に遊びを進めていく楽しさを味わう。	・自然体験や感動体験を通して、遊びを進めていく楽しさを味わう。 ・友達と一緒にイメージを出し合って、遊んだり表現したりすることを楽しむ。	・グループで共通の目的をもち、自分たちで生活を進めていく楽しさや充実感を味わう。
		内 容	・友達と一緒に戸外で体を動かして遊ぶ。 ・年長としての自覚をもって、生活習慣を整える。 ・身近な動植物に親しみを持ち、世話をする。	・友達と競い合って遊ぶ。 ・水や砂の感触を十分味わいながら遊ぶ。 ・ルールのある遊びをする。	・いろいろな運動に興味をもち、進んで体を動かして遊ぶ。 ・かいたり、つくったりして遊ぶ。 ・友達と役割分担したり、ルールを工夫したりして遊ぶ。	・友達と一緒に遊びや生活を進める。 ・感じたことや、考えたことをいろいろな方法で表現する。 ・自然物や素材を遊びに取り入れる。	・戸外で存分に体を動かして遊ぶ。 ・文字や数量に関する遊びをする。 ・いろいろな表現遊びを楽しむ。
		環 境 ・ 援 助	・年長になった自覚をもって取り組めるように生活の環境を幼児と共に工夫する。 ・安心して、活動に取り組めるように、時間や一日の流れを考慮する。	・発達が十分保障できるように、活動内容や取り組み方などについて創意工夫をする。 ・自分の思いや、考えを出して遊べるように必要に応じてかかわる。	・遊びの中で、様々な動きが体験できる環境を工夫する。 ・幼児が相談したり、遊びを発展させたりできるように場や時間を十分に確保し、自分たちで生活を組み立てられるようにする。	・遊びを進められるように、幼児の思いをくみ取りながら、環境を共に考えていく。 ・幼児の発見や、驚きに共感したり、他児に伝えたりする。	・挑戦している姿を認めたり励ましたりして、より意欲がもてるようにする。 ・遊びながら、文字や数に興味や関心をもつように援助する。 ・共通の目的に向かい、力を合わせて取り組める。

おいても大きく異なるものではなかった。

### 3-2. A 園の週指導計画 (週案)

週案はファミリー保育とフレンド保育を分けずに記

録されており、箇条書きで記された「ねらい」に加えて、園内の概略図の周りにそこで行う遊びの種類が、その遊びでの△または▲で示された教師の関わりと●または○で示された幼児の様子とともに記入されてい

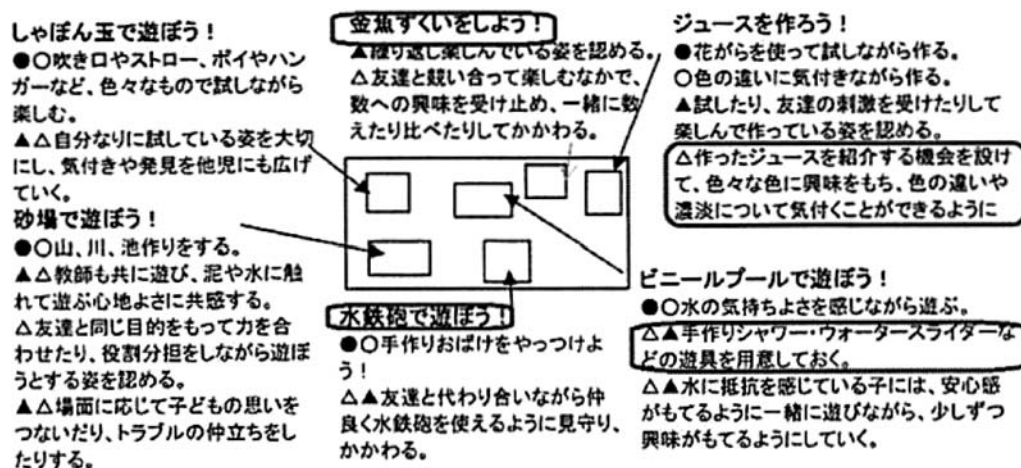


図1 A園の週指導計画案の記録例（2013年7月1～12日）

た（図1）。「ねらい」は市の年間指導計画（表1）の「目標」に、「教師の関わり」は「環境・援助」の援助に相当するものと言える。「子どもの様子」はその遊びや援助から想定される姿を記したものであり、教師側の保育を示すものではないため本研究の分析対象にはしなかった。週案は原則週単位であったが、複数の週にわたった週案もあり、とくにⅤ期は1月8日から17日までと1月20日から3月14日までをそれぞれまとめた記録しか残されていなかった。以下、「ねらい」と「環境・援助」を分けて引用する。

#### 1) ねらい

週案に記述されたねらいを期ごとに時系列に沿って全文を引用する。ねらいの記述が前週と同じ場合は省略した。明らかに異年齢保育のためのねらいと言える箇所には下線を付けた。

I期：①自分のしたい遊びを見つけ、友達と一緒に楽しむ。②一緒に色々な準備をしたり遊んだりすることで、年少児は年長児に親しみをもち、年長児は頼られる喜びを味わう。(2) ③年長児が年少児に親しみをもち積極的にかかわることで、思いやりの気持ちを持ったり、安定して生活できるようになる。

II期：①年長児の刺激を受けて、一緒にやってみたり、遊びを伝えあったり、かかわって遊ぶ。②お互いにイメージを出し合ったり、遊びを伝えあったりして共通イメージで遊ぶ。③一緒に水遊びやプール遊びをし、試したり、工夫したりしながら互いに刺激を受けて遊ぶ。④水遊びや作る活動など、刺激しあったり、伝え合いながら遊びを広め、楽しさや満足感を味わう。⑤お互いの成長を見つけ、認め合う。

III期：①夏休みに経験したことを話したり、遊びに取り入れたりして、友達と一緒にあそぶ。②いろい

ろな行事について年長児が年少児に伝え、リードしながら楽しく取り組む。③活発に体を動かし、助け合ったり、競争したりしながら、友達とのびのび体を動かす充実感を味わう。④みんなで体を動かして遊んだり、競い合ったりして運動する楽しさを味わう。⑤ペアで力を合わせて、運動会に向かって取り組む。(筆者注：ペアは5歳児と4歳児のペアを指す) ⑥いろいろな人とかかわりを楽しみ、親しみをもち。⑦自分の思いや考えを表現する気持ちよさを味わうとともに、相手の言葉にも耳を傾けようとする。

IV期：①友達とアイデアを出し合い、工夫して遊ぶことを楽しむ。お互いに刺激し合いながら、遊びを盛り上げたり、挑戦する気持ちを高めたりする。②お互いに刺激を受けあいながら、いろいろなことに挑戦する気持ちをもつ。③お互いに刺激を受けあいながら、いろいろなことに挑戦したり、親しみをもち、ともに活動を楽しんだりする。

V期：①お互いに刺激を受けあいながら、いろいろなことに挑戦したり、親しみをもち、ともに活動を楽しんだりする。②互いの取り組みを伝え合いながら、刺激を受けて、さらにやってみようとする気持ちを高めていく。③刺激を受けあったり、認めたりしながら、ともに遊ぶ楽しさを味わう。④春が近づいていることを感じながら、お互いに親しみをもち、一緒に遊びを楽しむ。

以上の週案に記された「ねらい」は、すべて子ども同士の関係に関する内容であった。異年齢児の交流に関わる記述はI期からIII期までに見られた。

#### 2) 教師の関わり

記述が多いため子ども同士の交流に関わるものだけ

を時系列に沿って引用し、その中で異年齢児の交流を促す記述に下線を付けた。また、各記述の文頭に遊びの種類を括弧で示し、かつ週案原文と同様に△は 5 歳児対象、▲は 4 歳児対象を示す。同じ期で、同じ遊びに対する既出の記述は省略した。

I 期：① (固定遊具) △▲順番を守り、友達と関わりあって、遊べるように声をかける。順番を守り、友達と関わりあって、遊べるように声をかける。② (砂場) ▲遊びの中で友達とのかかわりが持てるように配慮する。△▲道具の取り合いなど、お互いの気持ちを橋渡ししたり、言葉を知らせたりしながら友達とうまくかかわれるように手助けする。③ (固定遊具・パカポコ) △▲順番を守り、友達と関わりあって、遊べるように声をかける。④ (砂場) △▲道具の取り合いなど、お互いの気持ちを橋渡ししたり、言葉を知らせたりしながら友達とうまくかかわれるように手助けする。⑤ (スクーター) △▲友達と代わり合いながら、楽しく遊べるようにかかわる。

II 期：① (スクーター) △▲友達と代わり合いながら、楽しく遊べるようにかかわる。② (色水を作る) △友達や年少児に方法を伝えながらいろんな色を作っている姿を認める。③ (砂場) △友達と同じ目的を持って力を合わせたり、役割分担をしながら遊ぼうとする姿を認める。△▲場面に応じて子どもの思いをつないだり、トラブルの仲立ちをしたりする。④ (金魚すくい) △友達と競い合って楽しむ中で、数への興味を受け止め、一緒に数えたり比べたりしてかかわる。⑤ (水鉄砲) △▲友達と代わり合いながら仲良く水鉄砲を使えるように見守り、かかわる。⑥ (ジュースを作ろう) ▲試したり、友達の刺激を受けたりして楽しんで作っている姿を認める。⑦ (シャボン玉) ▲自分なりに試している姿を大切にし、気づきや発見を他児にも広げていく。⑧ (砂場で遊ぶ) △友達と同じ目的を持って力を合わせたり、役割分担をしながら遊ぼうとする姿を認める。△▲場面に応じて子どもの思いをつないだり、トラブルの仲立ちをしたりする。⑨ (金魚すくいなどの水あそび) △▲譲り合って遊ぶことや、終わった後の片付け方などの約束事を知らせていく。

III 期：① (固定遊具) ▲△順番を守ったり、遊具の上ではふざけたりしないことを再確認する。② (スクーター・パカポコ) △▲場の取り方に配慮し、他の遊びとぶつからないように工夫する。③ (泥だんご) ▲△友達を比べる機会を作り、コツを伝え合ったり、継続して取り組み、ピカピカになった嬉しさが味わえ

るようにする。

IV 期：① (マリオの迷路) △▲みんなで話し合いながら、共通のイメージを持って遊び、友達との遊びがより楽しいものになるように環境を整え、工夫していく。② (ダンスステージ) △▲友達と楽しく表現している姿を認め合いながら、遊びを盛り上げていけるように衣装などを用意しておく。

以上の子ども同士の交流に関する記述の中で、異年齢児の交流を意識したものは II 期の 1 件のみで、他は異年齢、同年齢のどちらにも当てはまる内容であった。また、4 歳児だけ、または 5 歳児だけを対象にした記述は少なく、ほとんどが両方を対象にした内容であった。遊びの種類については、夏のプールやシャボン玉などの水遊び、春から秋にかけての虫探し、だんじり遊び、冬のカード遊びや体が暖くなる遊びなど、季節に応じた遊びがある一方、季節性のない固定遊具や砂場遊びなどが各期にあり、異年齢保育を意識したような遊びの配置は見られなかった。

### 3.3. 異年齢保育に関する質問に対する園長の回答

各質問項目に対する園長先生の回答を、異年齢保育に直接関係ないか、重複した表現を除き、そのまま引用する。

質問 1：異年齢保育をすることについてどのように考えていますか。

回答：異年齢保育は、待機児解消のもと、4、5 歳児を混合にしたクラスを編成するということから始まった。1 歳の年齢差はとても大きく、全て同じ担任が同じ内容で、クラス経営することはできない。4 歳児は背伸びをし、5 歳児は後退していくのではないかと不安がる保護者もいた。そこで、年齢別保育を充実させ、発達段階の差をしっかりと把握し、年齢別の担任としている。異年齢児保育が始まるまでは、週に 2 回程度、異年齢児保育の取り組む集会などを行っていたが、生活の場を共に毎日することほど、親密感の湧くものはないと実感している。

質問 2：実際に実践してみて、目標を達成していますか、まだできていないところはありますか？

回答：異年齢保育を行い、生活の場を毎日共にしていることから、自然とかかわりが持てるようになってきている。個々の子どもの発達の差から、4 歳児でも 5 歳児と遊ぶことを好んだりする姿もある。また逆に、少し幼い 5 歳児が 4 歳児と遊ぶことで、自分の居場所ができ、自信が持てるようになる。4 歳児は、

5歳児に憧れや感謝の気持ちが育ち、5歳児はいたわる心が育っている。4歳児、5歳児の担任教員が変わるために、クラスの子どもへの引き継ぎは十分にしていこうと努めている。

質問3：異年齢の結びつきについて、どのようなことに注意して関わりや援助を行っていますか。

回答：同じクラスに4歳児、5歳児が在籍しているので、自然にかかわりが持てるようになっている。その中でもあえて、4歳児、5歳児の1対1のペア作り、ほとんどの行動はペアであることが多い。ペアの組み合わせは、学期に1回ずつ交代している。1学期は、まだ友達の様子がわからないので、教師側から決めることがあるが、2学期からは子どもたちでペアを決めている。その際どうしても消極的でかわれない子ども、ペアになれずに困っている子どもなどの様子を把握し、声かけなどの援助を行っている。ペアになったものの、負担が大きくなり、保護者からの相談もある時は、その都度かわりの様子を十分に把握し、その都度対処していく。

質問4：Ⅰ期では特にどのようなことに注意して環境を構成していますか。そしてどのような遊びを中心に行っていますか。子どもたちとの関わりや援助で心がけていることは何ですか。

回答：入園当初は家庭的な雰囲気、子どもたちが落ち着いて安心して遊べる環境作りに努めている。初めての集団生活の子どももたくさんいるので、まずは一人でもじっくりと遊びに取り組めるような玩具などを準備している。一人で存分に遊んでいる姿を認めながら、個々の声掛けを大切に、徐々に他児たちの遊びに興味、関心が持てるような援助をしていく。(入園当初なので4歳児を意識している。)

質問5：Ⅱ期では特にどのようなことに注意して環境を構成していますか。(以下、前問と同)

回答：一人一人の子どもが、どんな遊びに興味があるのかを探り、落ち着いて満足できる遊びの場を設定していく。この時期は、夏の遊びが存分にできるので、水遊びを中心とした場の設定をしていく。例えば砂場の山、川作り、トンネルを作ったり、ダイナミックに活動の場を広げていくことで、他児たちと一つの遊びを繰り広げられていく。こうした中で友達を意識して関わっていく楽しさを知らせる。友達同士がつながっていけるような言葉がけの援助をしていく。

質問6：Ⅲ期では特にどのようなことに注意して環境を構成していますか。(以下全質問と同)

回答：1学期の基本的な生活習慣が身に付き、集団のルールも少しずつ理解できてくる時期である。運動会、絵画展、地域の祭りなど、とても大きな行事のある期で、子どもたちの著しい成長が伺える時期でもある。例えば運動会…全員で協力して、一つの表現を成し遂げる活動で、集団行動の大切さを知らせる。協力し合う姿勢が自然に身についていけるような言葉がけを大切にしている。

質問7：Ⅳ期では特にどのようなことに注意して環境を構成していますか。(以下、前問と同)

回答：友達を意識し刺激しあいながら、協力してできた喜びの味わえるような内容を取り組んでいく。お店ごっこ…自分でしたい店を決めて、品物作りをしていく。その中で自分の思いを出し合って、一つの店づくりへと進めていく。子どもたちの思いに沿いながら、必要に応じて材料、方法についてアドバイスをしていく。個々の役割分担を明確にすることでスムーズにお店ごっこが展開できるようにする。

質問8：Ⅴ期では特にどのようなことに注意して環境を構成していますか。(以下、前問と同)

回答：1年間の集大成として、自分の思いを表現し、相手の気持ちも受け入れていく姿が表出できる発表会の取り組みを中心としていく。生活発表会(年長)…小グループに分かれて、できるだけ自分の思いを発言しやすい人数のグループとしている。また他児の意見も聞き入れながら、一つの催しを決めていくようにする(意見の葛藤場面がある時は、仲裁に入り、互いの思いを引出すような援助をしていく)。

園長の回答では、異年齢保育と並行して複数の教師による同年齢保育(フレンド保育)の重視、異年齢児がペアで共に生活することの重要性、年間指導計画に沿った保育の流れが語られた。

#### 4. 考 察

異年齢保育について市の年間指導計画を分析してまず気づくことは、異年齢保育(ファミリー保育)の「目標」「内容」「環境・援助」がそれぞれ同年齢保育(フレンド保育)とは分けて記述されているにもかかわらず、異年齢児の交流を促す記述がほとんどないことである。これは、ファミリー保育の「異年齢児が自然なふれあいの中で刺激しあい生活を共に楽しむ」という趣旨から、「自然なふれあい」を重視し、異年齢児の交流を促進するための意図的な工夫や働きかけはしないということが理由であると考えられる。実際、



週案に記された教師の関わりの中に異年齢児の交流を促す援助はまったくなく、異年齢児に関する記述は指導や援助といった関わりではない「友達や年少児に方法を伝えながらいろんな色を作っている姿を認める」という 1 件のみであった。

異年齢児の交流を促す意図的な関わりをしないことは、教師が日常のファミリー保育において異年齢児の交流に注意を向けていないということではない。週案の「ねらい」はほとんどが子ども同士の交流に関するものであったが、年間指導計画にはなかった異年齢児の交流を明記した表現がⅠ期からⅢ期まで見られた。それは、教師が異年齢保育を意識した週案を立てていることを表していると言えよう。

週案の中に年齢差を意識した援助の記述があまり出てこないのは、A 園の異年齢保育は 4 歳児と 5 歳児のみで年齢差が 1 年だけであるため、同年齢保育とあまり変わらないことが理由の 1 つかもしれない。実際、園長の回答の中でも、子どもの発達の差により 4 歳児でも 5 歳児との遊びを好んだり、その逆の関係があったりしていることを語っている。しかし、子ども同士の関わりを促す環境や援助は、異年齢保育でも同年齢保育でもあまり変わらないという理由も考えられる。広瀬・太田 (2010) が異年齢保育を長年続けている保育士に対して行ったアンケート調査では、保育士が異年齢保育で工夫・配慮している点や難しいと感じている点の多くは『保育所保育指針』にも書かれている保育の質を向上させることに通じる内容であり、異年齢保育にかぎらないものであることを指摘している。

異年齢児の関わりを「どのように」促しているかという点については、指導計画や週案の中の教師の関わりには異年齢保育を示す記述がほとんどなく、答えになるような保育の方法はそこには見出せない。本研究で唯一の答えは、園長が質問 3 に対して回答した「あえて、4 歳児、5 歳児の 1 対 1 のペア作り、ほとんどの行動はペアですることが多い」という記述にある。異年齢児をペアにした保育は、実験的にペアを作った例 (須々木ら 1991, 仲野・後藤 2002) や、異年齢保育にペアを推奨した例 (藤岡 2004) がある。また、遊びや散歩などの保育の一場面で異年齢児がペアを作ることとは普通に行われている方法である。しかし、A 園のように異年齢児がペアを組んで日常的に行動する保育方法を実践している例を紹介した論文は皆無であろう。

園長の回答によれば、最初のペアは 1 学期の初めに

教師が決めている。知らない相手とペアを組むことは、5 歳児は前年に経験しているため抵抗はなく、4 歳児は入園時の不安があるためいつも傍にいてくれる 5 歳児とはすぐに兄弟姉妹に対するような信頼感が生まれることが想像される。ペアができれば、後は園長の回答にあるように、毎日共にしていることで自然とかかわりを持つようになる。質問 1 に対する“生活の場を共に毎日することほど、親密感の湧くものはないと実感している”という園長の回答がそれを物語っている。ペアの二人がぶつかった時には教師の援助が必要になったり、ペアを交代したりするが、普段はペアの関係を見守り、認めるだけでよくなる。週案に記された教師の関わりに異年齢児の交流を促す記述がないのは、その必要がないからだと言っていることができる。

異年齢保育は、いたわりや友だちを思いやる気持ちを育むといった意義が語られることが多いが、それは「いたわり」や「思いやり」は年少児に対する年長児の気持ちを中心においた見方である。異年齢保育の重要な意義はむしろ年少児にあり、年長児とともに生活していく中で、行動を真似たり刺激を受けたりして自然に学ぶことができる環境を作ることにあるのではないだろうか。そのことについては、坪井・山口 (2005) も「異なる年齢の友達と関わることは、年下の子どもにとって自分の近い将来の目標を目にすることになり、成長への手本を与えてくれる」と指摘している。日常的に行動を共にするペアの異年齢児は、少子化で失われつつある年の近い兄弟姉妹の代わりであり、どう関われば相手がどう反応するかといった人間関係を体得することができる。日常的な生活を共にした異年齢保育は、教師や保育士には教えることができない自らが人間関係力を育む場であると言えよう。異年齢保育の意義がそこにあることを考えれば、異年齢児の交流を意図的に促すような援助というよりは、むしろ異年齢児が共に生活して自然にかかわることの方が重要である。年間計画指導計画において、フレンド保育にある社会性を促すような教育的表現がファミリー保育にないのも、その観点からみれば理解できる。

そこにおいてペアに対する教師の関わりは、見守りながらペアの関係を理解し、問題があればペアに関わり、時にはペアを交代させるといった援助が中心になる。A 園では、園長の回答によれば 1 学期は教師側がペアを決めるが、2 学期からは子どもが自分たちで決めており、その際にペアになれない子どもへの援助、その後、ペアに問題が生じた場合に、様子を十分に把握した上での対処、といったことが行われてい



る。異年齢保育での難しさは適切なペアを作り維持していくことにありと思われる。

## 5. おわりに

本研究では、異年齢保育がいまだに保育形態の主流にならない理由として、異年齢保育への転換に対する不安があるのではないかと考え、その不安を減らすために異年齢保育を長年実施している A 園における保育の実際を市の年間計画と園の週案の記録をもとに紹介した。その結果、年間計画や週案には異年齢児の交流を促すような記述は少なく、異年齢保育の内容は同年齢保育とあまり変わらなかった。つまり、A 園の保育は異年齢保育に転換しても保育の方法が大きく変わらないことを示しており、保育が急に難しくなることはないと言えるであろう。また、A 園では、異年齢保育を初めに異年齢児のペアを作り、日常的にペアで行動する方法をとっていた。それによって、教師は異年齢児の交流を意図的に援助せず、異年齢児の自然な交流を通して人間関係力を育もうとしていることが園長の回答や週案から読み取ることができた。

本研究の結論は、異年齢保育に対してあまり不安を持つ必要はないであろうということであるが、異年齢保育が容易だと言っているのでは決してない。例えば、子どもの発達の違いが要因である異年齢児間のトラブルが起こる。そうしたトラブルが起こった場合、それに対応するには教師や保育士の専門的な力量が必要になる。しかし、トラブル解決に最も必要な力量である「子ども理解」の内容は同年齢保育でも異年齢保育でも変わらないと言える。

本研究の課題は、A 園での異年齢保育が2年保育の4, 5歳児を対象にした結果であり、3年保育の3, 4, 5歳児にも当てはまるかどうかということにある。今後、3, 4, 5歳児の異年齢保育で実践している保育施設で同様の観点からの研究が望まれる。

## 謝辞

本研究についてご理解をいただき、関係資料の閲覧の許可と質問紙調査の回答をいただきました A 幼稚園の園長先生に深く感謝いたします。

## 引用文献

- 中央教育審議会（2000）少子化と教育について（中央教育審議会報告）。[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_chukyo\\_index/toushin/1309769.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309769.htm)（2017年10月11日閲覧）
- 藤岡教子（2004）ペアづくりから始めてみて・・・

- ～異年齢での集団づくり～。季刊保育問題研究, 206, 110-114.
- 広瀬由紀・太田俊己（2010）異年齢保育に携わる保育者の意識に関する調査研究：千葉市の保育者を対象にした質問紙調査に基づいて。植草学園大学研究紀要, 2, 69-76.
- 石川拓次（2017）三重県における異年齢児保育の現状－規模による分類の比較を中心にして－。鈴鹿大学短期大学部紀要, 37, 29-41.
- 石野秀明（2014）幼保一体化に向けた研修モデルの検討－兵庫県下の保育者に対する調査の分析－。兵庫教育大学研究紀要, 44, 43-52.
- 岸和田市子育て支援地域協議会（2015）岸和田子育てガイド『みんなでこそだて』。No.12. <https://www.city.kishiwada.osaka.jp/uploaded/attachment/35552.pdf>（2017年10月13日閲覧）
- 小泉栄美・野中弘敏・中野隆司（2013）縦割り保育で子どもたちが経験していること－異年齢間の関わりのエピソードをもとに－。山梨学院短期大学研究紀要, 33, 49-61.
- 厚生労働省（2008）保育所保育指針。チャイルド本社
- 宮里六郎（2001）異年齢保育実践の課題と「保育計画」づくり。季刊保育問題研究, 190, 86-101.
- 永久欣也（2009）異年齢児集団の保育活動について－久留米地区における異年齢児保育活動の実態調査より－。筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報, 20, 267-276.
- 仲野悦子・後藤永子（2002）異年齢児とのかかわり－いたわりと思いやりの心の育ち－。保育学研究, 40, 260-268.
- 日本保育協会（1998）保育所の保育内容の実態に関する調査研究報告。[http://www.nippo.or.jp/cyosa/11/11\\_ta.html](http://www.nippo.or.jp/cyosa/11/11_ta.html)（2017年10月13日閲覧）
- 大山摩希子・浜崎隆司・鍛冶礼子（1994）保育形態の違いが幼児の社会的行動に及ぼす影響。東海女子大学紀要, 14, 131-139.
- 島田知和（2016）異年齢保育における社会性の発達に関する一考察。別府大学短期大学部紀要, 35, 67-77.
- 須々木百合子・青木倫子・風間節子・小林孝子・坂口やちよ（1991）異年齢集団による保育とその実践。長野県短期大学紀要, 46, 83-92.
- 田中 洋（2017）異年齢交流活動における幼児の社会的行動の発達に関する短期縦断的研究。大分大学教育学部研究紀要, 39, 105-119.
- 坪井敏純・山口 郁（2005）異年齢保育の中の子どもたち。南九州地域科学研究所所報, 21, 1-10.
- 山本理絵・藤井貴子（2014）人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援（1）。愛知県立大学教育福祉学部論集, 63, 99-110.
- 吉田行男（2009）札幌市及び周辺地域における異年齢保育の実態調査報告書。<http://blog.canpan.info/hassamuhi-kari/img/14/jittaityousahoukokusyo.pdf>（2017年10月13日閲覧）

